地質新報

近代作家研究叢書

⑥

近代作家研究叢書69

監修／吉田精一

荷風雑観

佐藤春夫著

解説／竹盛天雄

日本図書センター

近代作家研究叢書69　監修・吉田精一

荷風雑観

1989年10月15日印刷
1989年10月25日発行

著　者　佐藤春夫
解説者　竹盛天雄
発行者　高野義夫
印刷所　モリモト印刷株式会社
製本所　有限会社東明製本
発行所　株式会社日本図書センター
東京都文京区大塚3－4－13
電話03(947)9387　振替東京2-8206

落丁・乱丁本はおとりかえします。　**定価5,150円**(本体5,000円)

ISBN4-8205-9022-7 C1395 P5150E

引

本書は荷風論でもなくまた荷風傳でも、研究でもない。その目的ならば著者は素よりその任ではないと自ら知つてゐる。これは看板に僞なく、どこまでも荷風に對する著者一家の管見であり、雜觀である。

本書の主要部分は東方書局が刊行の豫定であつた北京版永井荷風選集が時局の影響によつて一時中止となつたので、先づその解說のみを發表するに當つて、「最近の永井荷風」と著者が從前折にふれて執筆して置いた荷風の著作兩三篇に對する解說風の雜稿を併せ編んだものである。事に當つて珊瑚集の解說に加筆する傍、更に偏奇館吟草に言及して「詩人荷風」の一篇が偶々成つた外はみな舊稿である。かうして取纏める事で著者の意見は幾分立體化したとは思ふが、また隨所に愚說

の反覆が露はれた。もと各篇がそれぞれ獨自の一篇であつたがためである。聊か見ぐるしくないでは無いが、これ等の重複を一種の自然な力說と見なしてこれを存し、敢て刪り去らなかつた。

雜稿であり、隨筆であるから、或は傳の如く、或は論の如く、さてはまた著者半生の悅慕の情を抒するなどすべて雜然として未整頓のままに殘されたところが雜觀の雜觀たる所以と見られたい。他日多分その完全な全集を見たる後、荷風の「爲永春水」を範としてこれを改める日を得たい。

本書は徹頭徹尾、荷風の人と藝術との理解を眼目とし、その目的のための必要に應じて時に傳を云ひ、また假に論に及ぶだけである。蓋し理解はあらゆる讀者の義務であり、また正しい鑑賞と批評との基礎だからである。とは云へ、この心を心としても九尺梯子は九尺だけの譏を免れ得ないのも亦是非もない。

本書は荷風傳、荷風論、荷風景仰などすべての點で更に增補し改訂し整理されなければならないものの心覺えであり、未定稿である。それ故、上欄に餘白を

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

設け、折にふれての書き込みの便に具へて重版や改稿の機を期した。看官の各位も亦これを利用して著者の管見の反應を記入しつつ各自一家の荷風論のノートとするとともに、機を得て著者に示教を垂れるに吝ならざらん事を望む者である。管見が何ら各位を啓發するに足らずとも、各位の考察の端緒ともならば本懷である。

余や性甚だ粗放迂濶に、日常、ひとり合點、早合點の事のみ多く且つは近來記憶力の衰退を加へて自ら苦笑を禁じ得ない事のみ多い。書卷に對するに際し或は禿筆を呵するに當つてさへこの事の少くないのは最も歎かはしい。まだ潦倒の年でもあるまいに自ら憐れむに堪へたものがある。それ故近來は努めて注意し再三稿を改める事を辭せぬがなほ興に乘じてか、杜撰遺漏を免れ難い。評家の時に謂のない難詰を恣にしながら、この輕率臆斷を戒め正す深切に乏しいのは憾とするところであつたが、頃日本書中の「永井荷風」を「展望」誌上に發表するや吉田精一氏が懇切な尺牘を寄せて幾多の再考を要する點を綿密に指摘された。それに

よつて尠からず蒙を啓かれ幾分是正することを得たのは徳とするところである。

又、佐藤正彰氏は本書の出版や原稿作成の機縁をつくられた上に種々の援助や便宜を與へて激勵された。茲に附記して感謝の忱を致す者である。

昭和丁亥　閑古鳥鳴く頃

長野縣北佐久郡平根村の寓にありて

佐藤春夫誌す

目次

最近の永井荷風　一
永井荷風―その境涯と藝術―　四一
腕くらべ　一三三
おかめ笹　一四九
濹東綺譚　一六五
再説濹東綺譚　一七九
詩人荷風　一九五

最近の永井荷風

最近と題してもこれは
昭和二十年晩春の稿で
その後荷風の活動は甚
だ目ざましかつたから
昭和二十年五月以降に
は觸れてゐない。

この題目に對して妙にこだわりのある、固くなり勝ちな心をほぐし、兼ねて又、その心の由來するところを明かにする目的で、先づひとつまくらから書き出さう。

あれはいつの事であつたらうか。多分「濠東綺譚」の直後の頃と思ひ出されるが、一日レインボウグリルの芥川賞の會議でお互がさまざまな意見の交換に馴れた折しも、佐佐木茂索氏が唐突に思ひがけなく僕に對して、いつか折があつたら聞いて見たいと思つてゐた二つの疑問があると切り出したのは、鷗外の「歌日記」中の或る作品に對する僕の解釋に就ての疑義が第一であつた。これは云はれてみると明かに佐佐木説が正

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

しく、僕の解釋は少々行き過ぎの曲解らしいと氣がついたので、その場で佐佐木氏に兜を脱いで、直ぐに自說を撤回するに吝でなかつたばかりか、すでに發表してゐたのを普及版の「陣中の竪琴」では佐佐木氏の注意による旨を附記して書き改めて置いた。佐佐木氏の第二の質疑といふのは僕の荷風崇拜はその意を解し兼ねるといふのであつた。同じ荷風崇拜でも神代種亮ならば別に怪しむにも足りないが、貴君が荷風崇拜であるのは年久しく腑に落ちないといふのであつた。この質問に對して僕は直ぐに答へるべき言葉を見出さないでゐると、佐佐木氏は重ねて第一貴君と荷風とはそれほど格段の相違がありますか、と彼はその質問の意味を明かにさせようとするかのやうに附け加へた。ありますとこれに對しては僕は先づ言下に答へて置いて、佐佐木の言葉は或は質問の形をもつてされた一種の社交辭令ではあるまいかとも考へて見た。芥川龍之介は

さういふ形を好んだ社交家であつたと覺えてゐるからである。しかしその芥川が小島の「柔」に對して、剛才人と稱した佐佐木はそんな外交辭令を用ゐる人でもなければ、また僕に對して何のその必要があらうかと直ちに思ひかへして、貴君が法外に僕を買ひ被つてゐてくれるのか、それでなければ偏奇館の先生を無理解に評價し足りないためにそんな錯覺が起つたのでせうと答へると、茂索は一笑して僕はまた僕で貴君が荷風を買ひ被つてゐるのだと見ますがねと云ふ。この時、僕は芥川が不思議なほど荷風文學を重んぜず一夕、永井荷風は一篇の西遊日誌抄にとどめをさすと放語してゐたのを聞いたのを思ひ出して、澄江堂門下で文藝春秋同人の荷風觀を一變させるのは一朝一夕の仕事では駄目である、なほさらこの立話ではと氣がついたから、今にゆつくり僕の荷風論を聞いて貰ふ機會もありましようが、僕自らの見るところでは、折角君が同列に

置いてくれようと云つても、殘念ながら靴の紐をも解くに足りない。格段の相違を感ぜざるを得ません。これは僕の卑下ではなく、批評家としての自尊で云ひますが、恐らくは漱石と龍之介、鷗外と荷風の程度、いやそれ以上の相違かも知れませんと云ふと佐佐木は終に一種の嚴肅な表情を示したので、僕は更に言葉をつづけて、かういふ感じは或は少年時代に受けた感銘から來る特別な作用かも知れません。うちのおやぢは大人になつてからもこわいものですからね。例へば僕の見るところでは澄江堂と君とでは既に格段の相違もないやうに見えても、君はやはり澄江堂を仰ぎ見てゐるでせうと云ふと、佐佐木は笑を帶びて、ではこの質問は當分宿題のままで殘して置きませう。でも「歌日記」の方だけでも解決したのはよかつたと立話は終つた。

自分は佐佐木との一夕の立話をかう覺えてゐるとともに、その時のまだ果さない約をも忘れてはゐない。その後今に、荷風論乃至は自分の荷風研究をものにしたいと心がけてゐる。「荷風讀本」はそのいい機會であつたのに、自分の微力と發行者の不誠意のために終に失敗にをはつた。そのために更に改めてこれをしなければならない重い義務を自分自らに負つてゐる。現に今もこの一文とは別に荷風論の構想を持つて行きなやんでゐる。自分は批評家としての主題を荷風と心ひそかに決めてゐる。それもいつになつたら出來る事やら。

十七八の少年で「あめりか物語」に魅了されて以來その新作を一つのがさず讀み入つて、學校では決して何事も學べないと知つてゐた自分が、一時三田の學塾に通つたのもそこで荷風の清輝を浴びる機會を把むためであつた。かういふ自分にとつては荷風を語る事は、やがて自分の

文學生涯の思ひ出をさらけ出すに等しいものとならう。是非とも一度は心ゆくまで書き盡したいとは思ふ。しかし、この心境の慌しい今はその適當な時機ではない。だから今日のこの一文は、ほんの荷風の近作に接した覺書に過ぎぬものとならうが、四十年に垂んとする間、作者を追つかけて來た讀者の一感想として、荷風文學の新しい讀者、それが現代の大多數であらうと思へるが、せいぜい濹東綺譚前後から知りはじめた程度の人々にとつては多少の興味もあらうかと思ふ。しかしこれは決して作者のために書くのではない。この覺書は亦必ずしも讀者のためにでもない。己のためにさうした新しい文學のためにその誕生のために書くのである。讀者の啓蒙こそ新しい文學の發生發達の最もいい肥料だと思ふからである。

原來、すぐれた作家すぐれた作品はすべて何人の解說をも要しないものであるが、荷風の場合はその現象が特に顯著である。すべての詩人は皆好んで己を語るに忙しかつたが、それでも荷風程の例は絕えて無いではなくとも稀に有るものであらう。荷風はその全集のあらゆる行で、或は直接に或はやや間接に己を語つて飽きない。荷風文學は水邊で己が水仙に變つてしまふのも氣づかないで己の姿を水に見入つて居たと傳へられるナルシサスの文學である。ただナルシサスは己の美に見入つてゐたといふが、荷風がナルシサスの如く己の美に見とれてゐたのか、それともナルシサスが荷風のやうな孤獨地獄のつれづれにそれほど己を追及してゐたのだか自分は知らない。ともあれ我々はこの不施不授に近いエゴイスト荷風に就て言葉を費して、その人の心を煩はす必要はない。一卷の荷風全集を反覆しさへすれば荷風に關するさまざまな疑問と同時にそ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com